

川越キャンパス発：コロナ禍における教職科目担当者の奮闘

What and how the faculty members in charge of teaching profession have thought, directed, and coped with the COVID-19 disaster to maintain their ordinary teaching?:

A roundtable discussion in Kawagoe campus

趣 旨

2020年度当初から続くコロナ禍。この紀要で教職課程の科目を担当する大学教員がこの事態をどのように捉え、何を考え、どのように克服しつつあるのか、その一端を紙上座談会という形にして記録しておきたいと考えました。

大学教員にとってコロナ禍は、大学教育の本筋や本質を改めて捉え直す機会にもなり、また新しい情報通信技術やそのコツを身につける機会にもなりましたが、苦悩やジレンマを抱えながら手探りを続け、先の見えない日々でもありました。数量的に全体像を把握すれば見えなくなってしまう教授陣の細部に光を当ててみますと、学生を思いやる姿が顕在化してきます。

参加者と担当科目

相賀由美子 (Yumiko AIGA)：道徳教育論

木澤利英子 (Rieko KIZAWA)：教育心理学(ビジネス英語)

高岩千尋 (Chihiro TAKAIWA)：職業教育II

永野俊雄 (Toshio NAGANO)：数学教育論ほか

西村吉弘 (Yoshihiro NISHIMURA)：教育制度論

原正 (Tadashi HARA)：地学実験ほか

山崎吉朗 (Yoshiro YAMAZAKI)：教育方法論

(*参加者は全て川越キャンパス教職科目担当非常勤講師)

企画・司会・執筆：大辻永 (Hisashi OTSUJI) (理工学部機械工学科)

はじめに

大辻 紙上座談会にご参加いただきまして、ありがとうございます。今回の趣旨は、コロナ禍において大学の授業者、特に教職を担当する私たちがどのようにこれを捉え、乗り越えてきているのかを、しっかりとまた詳細に後世に残しておこうということです。また、そうする中で、何か見えてくるものがあるような予感もあります。本構想に賛同いただいた先生方、またご承諾いただいた編集委員会の皆様に、ここでお礼申し上げたいと思います。さて、今回ご参加いただいたのは、いずれも川越キャンパスで教職課程の授業をご担当いただいている次の7人の先生方です。よろしく願いいたします。

授業の変化

大辻 2020年2月末に翌月からの登校自粛要請が突然発せられ、それ以降、教育界では大きな混乱が続いています。大学教育では2020年度当初から試行錯誤の状況が続いています。川越キャンパスは白山キャンパスに比べると、比較的スペースがあります。それでもキャンパス全体の学生数を管理・制御する観点から、学籍番号の奇数・偶数による対面日・非対面日を設定しました。クラブ等でのクラスタは出てしまいましたが、授業等でのクラスタ発生は防ぐことが出来ているようです。このコロナ禍によってご担当の授業にどのような変化が生じたのでしょうか？

高岩 私が担当する「職業指導II」では、他の人の生き方に触れるため、話し合い活動を重視しているのですが、オンデマンドでは時間差が生じてしまいます。そこで、授業の時間内に履修者間でWebex Meetingsを使うようにしました。

原 「非対面で」ということになりましたが、学生の通信環境を考えると90分の授業を50分程度にまとめるのがよいと判断し、画質・音質ともに落としてデータ量を少なくした動画を作りました。また、2020年度は15回で完結するプログラムを13回に組み直す作業が大変でしたし、そのあと、それを再度15回に組み直すのも大変でした。

大辻 本来目指し実施してきた授業の質と量を、枠組みが変わっても維持するという事は、実は想像以上の作業を先生方をお願いしていたようです。そして、やはりICT頼みになりました。別の見方をすれば、世界的な大規模感染症に情報通信技術の発達がなんとか間に合ったとも解釈できます。COVID-19よりも前から本学で導入されていたLMS (Learning Management System)、ToyoNet-ACE (一般には朝日ネット社製manaba) は、使ってみると非常に強力で使い勝手もよく、私たちの授業を大いにサポートしてくれるものでした。これについては、また後ほどまとめてお話をうかがいます。

相賀 毎週PowerPointの資料とその補足説明の文章を準備し、課題を設定しました。

原 私も、講義資料のスライドをPDF化したものをToyoNet-ACEにあげました。問題ないだろうと思っていましたが、プリンタを持たない学生も多く、端末の画面の精細度だけに頼っている学生もいました。しかし、通信容量のことを優先した結果、動画サイズは800×600, 96kbps、講義1回分の容量も200MB程度に抑えるようにしました。

大辻 2020年4月。講義が始まる第一週の月曜日は、ToyoNet-ACEが落ちるのではないかと固唾を呑んでいました。昼頃に動きが悪くなりましたが、他大学ではLMSが完全にとまったところもあったのに、本学は大きな問題になりませんでした。すぐに回線を太くする対応を採ったともうかがいましたが、Google Driveに置いた動画をToyoNet-ACEを経由してcloseで学生に見せられるということでしたが、回線への負担が増すだろうと考え、私は動画はYouTubeにあげることにしました。

山崎 Webexでのリアルタイムの授業と、事前に動画を作成したオンデマンドの授業を、組み合わせて行いました。連絡や提出はすべてToyoNet-ACEです。リアルタイムの必要がないものはなるべくオンデマンドにして学生がいつでも課題に取り組めるようにしました。昨年度はWebexのリアルタイム授業希望が多かったのですが、今年度はオンデマンドの希望が多く、リアルタイムで行う必要がな

い内容はなるべくオンデマンドにしました。ただ、やはり毎週の授業時間は意識した方がいいので、オンデマンドの場合でも、授業時間の時にレスポンスで簡単なアンケートに回答して、それを学生どうしで見られるようにしました。お互いどんなことを考えているか、どんな教育を受けてきたか、お互いの課題の進捗状況を知ることが出来たと思います。これを出席確認としました。やはり毎週同じ時間に、同じ課題を共有するというのは意義があったと考えています。学生には細かくアンケートをとり、不満が多ければ改善してきました。直接学生の様子が見ることが出来ないのですが、教室のように学生の反応をつぶさに捉えることは出来ませんでした。学生もこちらの懸命な実践に同感してくれていたように思えます。

木澤 家族に術後の基礎疾患がいるため、非対面での授業にいただきました。毎回45分程度の授業動画を作成し、授業日にToyoNet-ACE上で公開してきました。動画はPowerPointで作成したスライドに音声で解説を入れ、動画化して作成しています。対面でもそうですが、できるだけ能動的に参加してもらえるように、「Let's think」というスライドを複数挟み、動画を止めて自分自身の経験や例について考えてもらう機会を作りました。また、デモンストレーションも豊富に入れながら、心理学で扱う概念や現象について体感してもらえるように工夫しました。そして授業後の課題として、自身の経験や授業内容に関する疑問、また自分自身で調べてみたことについて毎回提出してもらっています。それらの記述を私の方でまとめ、コメントを付して全体に公開することで、同じ授業を受けているクラスメートがどのようなことを考えたのか、またどのような調べ学習をして知識を深めたのかを互いに知れるようにしています。

西村 我々教員がこの変化に対応していたかどうかが如実に問われていたのだと思います。つまり、授業を展開する際の理念や高等教育における教職科目の位置づけに対して、我々がHidden curriculumの設定等をきちんと盛り込んでいさえすれば、目先の授業形態の変化は問題ではないと思います。

悪戦苦闘・苦肉の策

大辻 ご指摘の通りです。では、その実態をもう少しうかがっていきましょう。

永野 いつも期日に追われ夜中の収録が続いて昼夜が逆転し、綱渡りの毎日です。

大辻 動画の有無に寄らず、先生方には大変ご苦労をおかけ致しました。ToyoNet-ACEに資料を置いておくと、プリントする手間が省かれたという点はあるかと思います。大学の用紙代も相当浮いたのではないのでしょうか。しかし原先生ご指摘のとおり、プリンタをもっていない学生もいたようです。USBに落としてコンビニで印刷していたのでしょうか？ 大学の図書館でプリントアウトしていたのでしょうか？

原 学生からはそう対応したと聞いています。

木澤 当初はToyoNet-ACEの掲示板を使って、各授業のテーマに沿った議論を行うことを考えておりました。ただ、学生さんの通知設定によっては、コメントが書き込まれるたびにお知らせが届いてしまうらしく、それでは余りにも煩わしいだろうと思い断念しました。とはいえ、互いの意見や疑問をシェアして深めていくことは必須であると考えたため、毎回私の方でまとめて共有している状態で

す。リアルタイム双方向型授業や、Responを活用した授業運営も考えましたが、何度も見直せることや、自分のペースで思考する時間を取れることに大きなメリットがあると考え、上述のようなオンデマンド形式の授業を実施することに決めました。

高岩 私の授業では、学期末に試験と模擬授業を行ってもらうのですが、2020年度は大学内で対面と非対面が混在し、秋学期の職業指導Ⅱはほぼすべての学生が非対面で受講したため、試験についてはToyoNet-ACEの「小テスト」機能を使い、模擬授業は動画で提出させ、これまでの対面授業に近い形で実施しました。

山崎 教室での授業ではこれまで、毎時間話し合いや協働作業をさせていましたが、非対面ではこれらができません。そこで、WebexでZoomと同じブレイクアウト・セッションが出来るようになってからは、節目毎に実施しました。混乱するので、Zoomは使用しませんでした。これは学生には大変好評でした。ただ、グループのメンバーを固定したり協働で作業させたりするのは難しいので、いくつか内容の変更を余儀なくされました。変更した一つはテストの作成と実施です。教育方法論なので、これは実際にグループでテストを作らせ、実施させる課題です。紙に印刷してその場で採点という作業をしていたのが出来ませんから、成績処理だけの内容になってしまいました。一方、アンケートの作成、集計、発表については、Google Formsを使って多くのデータを集めて発表させられたので、むしろ効果的でした。

西村 なんとといっても、期末試験時の机間巡視が出来ず学生の不正等の監視が行えません。そこで、いくつかの観点に沿ってポートフォリオを組みました。対面授業よりも項目数も増え、評価するときには煩雑になり、時間も労力も倍になりました。Zoomのブレイクアウトルームも使い、グループワークを行いました。その際、各グループの状況を俯瞰的に把握することができないため、グループごとに進捗の差が出て、即座に把握し適宜助言するといったやり取りができませんでした。

原 オンラインで天体観測を実施しました。地学や地学実験では、昼間に星の観測はさせられませんので、日時を設定してやってみました。遠隔、オンライン授業ならではの境地かもしれません。手応えがあったので、その後も15回目の授業として実施しています。Zoomの共有画面を使って、実際に望遠鏡を操作しているような感覚を届けることができました。鉱物実験では、サンプルを学生に郵送しました。ご協力いただいた教学課には感謝しています。観察には拡大鏡が必要なのですが、プラスチックの透明スプーンに一滴水を落とした水レンズがスマホでできるとわかり、やってみたら意外によく観察ができました。いまは、スマホに取り付けられる接写用クリップレンズを人数分用意して、使っています。講義にはWebex Meetingsも試みましたが、操作に慣れる時間も惜しかったので、YouTubeの限定公開で動画をUpしています。火山噴火や土砂災害、地震などの動画やシミュレーションソフトを操作して得た画像を見せました。リンクが外に漏れたときの不安はありました。対面の実験では実験器具の消毒を学生にしてもらいました。スプレー容器、ペーパーなどを用意し、10分ほど早く授業を切り上げてみんなで消毒作業をしました。思ったよりも熱心に対応してくれたので助かりました。

大辻 いま地学教育の分野では、オンライン巡検が流行っています。テレビの中継番組を見ているような臨場感があります。図らずも、それに似たものが実現しているんですね。

LMS (ToyoNet-ACE, manaba)

大辻 画期的といえば、ToyoNet-ACEもそうです。ToyoNet-ACEの「小テスト」機能を用いた中間・期末試験を導入しました。想定される正解を予め設定しておけば、LMSは自動採点してくれます。もちろん、部分点の幅もありますので、集まった解答全体を見直さないといけません。学生の解答がエクセルで一挙に表示されるため、語句や簡単な数値を問うような問題であれば、採点が一気に済むんでしまいます。この便利な機能にはたいへん驚きました。他大学では別のLMSを使っています。本学のLMSは文字修飾機能が充実していますし、わかりやすい画面構成だと思います。

山崎 私はコロナ前から必須の道具として使っていました。コロナ禍で学生もよく使うようになって、よく見るようになってくれました。

永野 大変使いやすいシステムで、ストレスを感じません。逆に、機能を充分使いこなしているのか不安です。

木澤 ToyoNet-ACEは比較的使いやすいと思います。現在、授業内容や振り返りの共有は「コースコンテンツ」、お知らせは「掲示板」、授業後課題は「アンケート」、テストは「小テスト」と「レポート」で管理しています。個人的な質問は「個別指導」を通してやり取りができること、ポートフォリオに追加することで学生さんが自分自身の学習を管理できる機能も大変便利だと思います。テストも、制限時間を設け、問題や選択肢をランダムにすることができるので、結果を見ても対面と遜色なく、習得の度合いを適正に測れていると感じています。

西村 使った機能は出席と「小テスト」だけでした。しかし、結果がエクセルで一覧になるので、とても便利でした。

大辻 エクセルファイルによる採点は、私ももう手放せなくなりました。採点にかかる時間と手間が、たいへん節約できています。

原 大学に出向かなくても授業が出来るというのは、驚異的だと思います。もちろん教育効果とは分けて考えなければいけません。また、リマインダ機能により学生に閲覧を催促したり、アクセスのない学生を特定できたり、掲示板で講義内容を深める議論や補講も可能でした。

高岩 時間制限をつけた記述形式のテストが出来るのはすごいですね。他大学のLMSにはこの機能がなく、学生の理解状況を見るのが大変でした。

大辻 欠点や要望はありますか？

高岩 私の使い方の問題かもしれませんが、コースコンテンツに講義レジュメ・講義動画や小テストのリンク・動画のスライドファイル・MP3音声など様々な資料やリンクを貼りつけて使うため、このページの編集作業に時間がかかっています。みなさん、どのようにご使用でしょうか？ 容量の大きい動画ファイルを直接Upできないのは不便を感じます。また、履修者ごとに異なる試験問題を出題し、問題の漏洩対策をしています。今年度は、マイコースに1人ずつ招待して試験を行いました。解答者を指定した問題の出題ができるといいのですが。

原 Webexで授業を録画しておいてあとから配信するのは、手間と時間がかかります。1日ほどのタイムラグもあり、残念ながら使いませんでした。学生がアクセスしなければ何も起こりませんから、学

生の自発的で意欲的な関わりに大きく依存します。講義内容や連絡事項がうまく伝わらないこともありました。意欲的でない学生を前提に情報を流し続けると、逆に読んでもらえなくなったりして、さじ加減が難しかったです。「知りませんでした」がないようにするため、基本しつこく告知を行いました。テキストベースでは、伝えられる情報が圧倒的に少ないです。絵を使おうとしても不自然な大きさになって、逆に伝わりにくい状況になることもあります。フィードバックに絡めて言うと、紙ベースでは、提出物に書き込みをして返却すればよかったです。オンラインだとコメントが長くならざるを得ないので非常に時間がかかります。現実的な方法としては、メモ帳にコメントを書きためて、それを答案に合わせてコピーする形です。この方法を使って大人数の授業に対処しました。しかし、時間をかけた割に、修正ポイントを伝えられていない感じがあります。Google Formで回収して、画像としてペンで書き込みを入れて返却する方法を提案されていた先生（高校教員）もいらっしゃいますが、これを毎回するのはきびしいです。

他大学・他教育機関と比べて

大辻 非常勤の先生の中には、他大学でのご経験もある方がいらっしゃいます。他の大学と比べて、いかがでしょうか？

永野 いずれの大学でも困難な状況下で、精一杯やっておられる印象です。頭が下がります。

山崎 そうですね。どこも苦勞していましたが、伝え聞くとところによれば朝令暮改の大学もあり、特に非常勤講師は対応がたいへんだったようです。本学は、方針がきちんと示されていた点はたいへん優れていると思います。非常勤講師への連絡はキャンパス間で差がありましたが、川越はたいへん早かったです。

大辻 近隣の大学では、80分授業にして昼休みの時間を長く確保し、昼食時の混雑を回避しています。食堂は、その場で暖かいご飯をよそうお弁当の販売で、距離を置いて着席、黙食というスタイルでした。

高岩 2020年度は大学による対応の違いを強く感じました。他大学では、ICカードの学生証を使ったキャンパスの出入りの記録や授業時の座席の記録、授業後の学生による座席の消毒、オンライン受講など教室内でパソコンを使用する機会が増えたため電源配線の追加を行っている大学がありました。また、教員の負担軽減も考え、配信しやすい教室やキャンパス内の通信環境の整備を進めた大学もありました。大学ごとにオンラインツールが異なるのも非常勤講師にとっては負担がありました。他大学ではZoomを使っており、本務先ではMicrosoft Teamsを使っています。

大辻 川越市で「理科指導力向上研修」というのを仰せつかっています。コロナ禍の2020年（昨年）は、動画をYouTubeにあげて、ダブルのオンデマンド形式で実施しました。つまり、授業ビデオをまずオンデマンドで参加する先生方にご覧いただき、その分析や感想をメール等で集め、さらにそれに対して私がコメントや解釈を加えた動画をオンデマンドで配信するという、多少のタイムラグはありますが（ラジオのリクエスト番組のように）双方向性のある手の込んだものでした。

西村 いわゆる偏差値の高くない大学では、実は、教員としては遠隔授業の方がストレスを感じにくくて

良い面がありました。授業中の私語、課題を指示した際の理解度の低さ、遅刻欠席の常態化といった懸念事項に対し、遠隔授業だといずれも対処しやすいのです。遠隔授業で指示書を配布すれば、何度も説明する必要もありません。課題の提出をもって遠隔授業の出席と見なしますので、必然的に彼らの勉強量も増え、こちらは遅刻のチェックの手間も省けました。特に、2021年度は大学によって対応が様々です。それに伴い膨大なマニュアルが配布され、一つひとつ読み込む必要があり、非常勤という立場では負担が倍増しました。

木澤 コロナへの対応やそのスピードは実に様々でした。白山キャンパスの英語授業は隔週対面、隔週オンデマンド（当初はZoomも）で実施をしています。対面の回はコミュニケーション活動に、オンデマンドの回は文法解説など知識習得に重きを置くことで、知識を生かした活動を行うことができるようになり、むしろ対面授業の質が高まったようにすら思います。他私立女子大学では、英語授業は対面との方針が決まっているため、毎週対面で行っています。座る位置など距離がある中、マスクを通した声が聞き取りにくいといった課題もあるにはありますが、英語に関しては特に対面のメリットを感じることも多いのが現実です。逆に、200名を超えるような大人数の心理系授業では、他私立大学でも対面に戻せずオンデマンドを継続しているものもありますが、これは先に述べたのと同様の理由から、むしろオンデマンドのメリットを強く感じています。特に授業後の課題を上手く設定することで、学習の質を高めることができる点で、対面授業に勝る授業になり得る可能性すら感じています。

学生の受け止め、表情、距離感

大辻 先ほど山崎先生から「直接学生の様子が見ることが出来ない」というご指摘がありました。これは、授業をする我々としては大変重要な観点です。振り返ると、学年による違いが顕著だと思えます。2020年3月に卒業した児童・生徒・学生は、卒業・修了式こそ無くとも学校（大学）生活でコロナの影響をほとんど受けずに卒業しました。2020年4月に入学した学生達は、新しい環境を立ち上げる時に打撃を受けたので悲惨です。この時2、3年生だった学生は、まだ従来の学生生活を体験していたので、友人もあり、学生らしい生活を実現できないジレンマの中、孤独に戦っていました。2021年10月末になってコロナウィルスの感染が一段落したいま、新入生の動きが心配です。オンラインの学園祭等によるまとまった休みをどのように使うか、予定が立てられない学生が相当数いたようです。新入生を対象にしたWelcome企画のようなものが必要だったと思います。対面授業でも学生はマスクをしているので、表情が読み取れません。不可解な表情をしている学生が少しでもいれば追加的な解説を言葉を替えて付け加えるのですが、彼らの表情が読み取れないので、本来理解させられる学生も理解させられないではないかと不安です。つまり、マスク一つで一方的な授業になっているのではないかと思います。

相賀 同感です。対面でもマスクをしてしまうと、学生が理解できているのか否かがつかめず、授業の進度の調整に困難を感じました。非対面について、アンケートでは、対面で説明してもらわないと授業内容が理解できないというものが多数ありました。しかしその反面、「今までで一番勉強した」と

か、「レポートの為に自分で調べることが出来るようになった」、「論理的な文章が書けるようになった」といったポジティブな回答もありました。理解度の格差が非常に大きくなったように思えます。

山崎 アンケートを見る限り、十分に学習して、寧ろ成果が上がったように思います。特に2020年度は、毎回のアンケート（授業についての考察）で大量に記入する学生が多く、何度か、熱心なのはたいへんありがたいが、専門科目の勉強に支障が出るといけないので、ほとほとにと伝える程でした。ToyoNet-ACEでの記述時間を見ると、一時間以上という学生もおり、負担は大丈夫かと懸念しました。オンライン授業全般についてもアンケートを取りましたが、毎回A4で2枚程度のレポートを課す授業がありたいへんだと書いている学生がいました。他の授業について質問した訳ではないのですが、よほどたいへんだったので訴えたかったのでしょうか。どの授業なのかわかりませんが、正直、どのような意図で、どの位の時間がかかるか予想して課題を出していたのか、いささか疑問です。あくまで学生経由の話ですが、私の授業は昨年度に引き続き、今年度（2021年度）もすべてオンラインにしました。本来、学生は隔週登校ということで、半分の学生は大学で授業を受けているはずでしたが、アンケートを見る限り（レスポンスでの毎回のアンケート）、半分が大学にいるというのは一度もなく、時によっては大学での受講は5分の1程度だったようです。在宅受講の比率は次第に増えていきました。他の授業はどのように受けていたのか心配していました。

木澤 毎回の授業後課題で提出される内容を見ると、対面で授業を行っていた時以上に知識が深まっているのではないかと感じています。授業終了後に振り返りシートを書いてもらっていましたが、記述内容の質はオンデマンド形式の方が明らかに高くなっています。これは、考える時間を好きなだけとれることや、何度も見返すことができるというメリットが生かされているためであると感じます。また、私に対する質問もこの形式の方がしやすいようで、教室で会話をするよりも数多くの学生さんと交流ができてるように思います。ただ、やはり表情は見えませんし、学生さんどうしの距離感を縮めることは十分にはできていません。互いの声を可視化して共有する以外に、できる工夫がないか今後も引き続き検討していきたいと思っています。

高岩 1限の授業だったのですが、対面と非対面（オンデマンド）を選択できるようにしたところ、早起きや通勤時間帯の混雑を敬遠したのか、非対面を希望する学生ばかりでした。2020年度は、コロナの流行状況が読めず定期券を購入できないと、経済的な理由も一部の学生ですが感じられました。職業指導Ⅱは、話し合い活動はあるものの実験を伴わない知識伝達が中心であるため、学生は比較的前向きに受け止めている印象でした。大学のオンライン授業やコロナ禍の対応について講義をした上で学生の意見を聞くと、前後の科目の都合でキャンパス内でオンライン授業を受講せざるをえないとか、非対面になり課題が増えたという問題点の指摘やキャンパスの利用ができないのに施設利用料が減額されないことについて（講義で説明をしても）納得がいけない学生が一部にいました。

原 Zoomで行った授業では、当初は参加者が顔を見せる形で定着しそうでした。これならば、対面授業に似た感覚で講義ができます。機器の操作など手技を伴う場合は厳しいですが、講義ならば可能なレベルだと感じていました。しかし、その後個人情報保護の観点から、ビデオオフが推奨され、これでは一方通行の授業と変わらないと感じました。このような判断もあり、オンデマンド方式を採りました。2021年度から半数が対面となり、中程度の教室での対面講義（出席者は20名～数名程度）

では、学生が後ろに席をとることと、顔がマスクで隠れることで学生の理解状況の把握が出来ないのではないかと心配しました。しかし、こちらが促せば、うなずく、目で笑う、質問に挙手で答えるなどボディランゲージ的なことをしてくれて、あまり以前と遜色なく講義ができると感じています（居眠りの姿勢はマスクの有無とは関係ありませんね）。ただし、コロナを抱えている現状では教室の講義で学生どうしの近距離の会話は教員から促すべきでないので、対話的な活動は行っていません。2020年度の全面非対面の体験からすれば、2021年度は、たとえ半数だけでも対面授業が出来、ありがたかったです。実験実習では、手技を伝えることや微妙な観察点を伝えるなど、対面ならではの効果を実感しました。現時点では積極的に出来ませんが、学生どうし議論したり共同作業をしてもらいと、生き生きと取り組んでいる感じが伝わってきます。やはり、人間には空気感を共有するコミュニケーションが重要だと再認識しました。余談ですが、2021年度春の実験の最初の授業の待ち時間に学生と話していて、彼らが対面授業の再開に非常に期待していることがわかりました。特に、コロナ禍入学の1年生で実験も動画を見るだけだったので今年は実験ができることが楽しみと語っていた2年生のうれしそうな表情は忘れられません。その一方、ToyoNet-ACE上の情報更新がなくても一日に数十回もアクセスを繰り返す学生もいます。不安から来る行為なのだろうと推察しますが、また、その不安をどう解消してあげられるのか、わかりません。

西村 公立大で、私が担当している授業の一環で、個別に学生の意識調査をPAC分析した結果、生活実態や悩みなどはコロナ前と比べ実質的には差異が無いことが判りました。マスメディアを通じて、学生の貧困や心のバランスの問題などが指摘されていますが、その要因がコロナによるものなのか、個人に元々潜在化していた問題なのかなど、より検討を深める必要があると感じています。頑張っている学生ほど、どのような形態の授業でも意欲を見せてくれるので、画面上の付き合いとはいえ教員としても張り合いがありました。カメラをオンの状態にするよう指示すれば、学生達の表情がよく見えて良かったのですが、むしろ、対面の方がマスク着用で受講しているため、表情が分かりにくく、また顔と名前がなかなか一致しません。やはり対面授業の方が、その場の雰囲気を読みやすく、発問の際に雑談や余談を取り入れたりしやすく、学生との距離感は近いと感じます。ただ、遠隔授業でもリアルタイムの形態で条件が許せば、さほど変わらない教育効果が得られると思っています。

新しい取り組みや今後に向けて

大辻 最後に、新しい取り組みや今後に向けて、お願いします。

原 学生はどこからでも受講できます。GPSデータを使った実験をさせたのですが、驚いたことに、富山や栃木の座標が報告され、教員と学生の距離が消滅するという意味を実感しました。

高岩 特別に、Webex Meetingsを用いて、異なるキャンパス間で同種の授業を履修している者どうしの交流を実施しました。

永野 大勢の方に支えていただいて何とか今日までやって来ることが出来ました。支えてくださった教員の方々、教学課を始めとする職員の方々、ITサポートデスクの方々、並びに学生の方々に深く感謝

を申し上げます。

山崎 コロナ以前は、講師室でわざわざ教員の所在を確認するなど、他大学ではあり得ない状況がありました。せっかく高性能なToyoNet-ACEを使っているのにオンライン授業ができないなんてと非常に残念な思いがありました。次年度以降、元に戻らないよう、オンラインのよさも活かした教育実践を川越全体でますます進めていって欲しいと願っています。

相賀 ICT全般についてですが、私は毎回何らかの問題が生じて講義に集中できませんでした。道德教育論の授業は、理論だけではなく実践的な要素があり、非対面授業には限界がありました。しかし、対面授業でも、いつも70人以上の一斉指導のため、個々に配慮した指導が非常に難しい状況です。教職の必修科目ですから、今後は半数位にできればと考えています。

木澤 授業形式ごとに一長一短ある中で、メリットを最大限に生かし、デメリットを減じる工夫をするしかない……というのがこの2年間の変わらぬ思いでした。教科の特性によって効果的な指導形式は異なるので、それを教員が自由に選択できるのは良いことだと思いました。非対面授業を敵とするニュースも多く目にしましたが、すべてはその内容次第だと思っています。工夫をし、またそれなりに時間を割けば（実際授業時間の2倍近く教材づくりや授業外対応にかかっています）、学習の質が下がることはないと思います。学生さんと話していても、授業が非対面であることよりむしろ、サークル活動やランチタイムといった友人作りの機会が失われてしまったことが不満の根源にあると感じてきました。ですから、対面で実施できる授業では、授業内容に関連付けて、できるだけ友人作りができる仕組みを取り入れることも重視しました。たった一回でも対面で互いに知り合う機会があると、その後の非対面授業に対するモチベーションも明らかに上がる様子が見てとれました。

西村 非対面、遠隔授業という新しい授業形態が、幸か不幸か普及しました。しかし、「対面か遠隔か」という二項対立の議論に終始することなく、大学としての理念や方向性は踏まえるとしても、担当教員の判断でうまく併用できるよう環境や制度を整備し、より効率性のある教育実践へと繋げていくことができるよう希望しています。特に、天災や電車のトラブルがあった時など、もしくは予めそれが想定される場合などは、事前に遠隔授業で対応するといった柔軟性はあっても良いでしょう。

おわりに

大辻 先生方、長時間わたりありがとうございました。印象的だったのは、ご退職され、第一線を退かれたはずの先生方も、アイデア豊富に、与えられた環境や条件下に、あの手この手を駆使されていたことです。一般にコロナ禍ではICT教育が浸透し、若手がそれへの対応力が高くベテランの対応力が低い、といった観念的な指摘がありますが、必ずしも当たっていないのではないのでしょうか。西村先生のご指摘のようにねらいや方法、学習者のつまづき、その時の対処法など、経験豊かな先生方は、逆境に置かれても、内に秘めたパッションと長年体得された方略と戦略で試行錯誤を重ね、対応されていました。当然学生の様子を組み入れながらきめ細かくご対応いただいていたと思います。ToyoNet-ACE(manaba)も補助的な大きなツールではありますが、部分的なツールでしかないようです。これをどう使うか、学習者がどう使っているかの想定力、総合的な教育力があってこそ、ICTも使いこな

せると言えそうです。

まとめ

今回は川越キャンパスの、理工系の学生を対象にしている先生方にお集まりいただきました。初等段階や文系科目、教科外の領域ではまた違った状況があると思われます。学術論文には数量的、また定性的な手続きを経たデータとその解釈が並べられます。それらも十分価値のあるものですが、そういう形にのらない、実際に教育活動に携わっている私たちの生きた声を残すということも、今回の紙上座談会という形式をとった一つのねらいでした。

実は、先生方に自由記述のアンケートをお願いして回収、編集しただけです。それでも、生き生きと、同時代的な私たちの生きている証が残せればと願っています。また、今後の研究・教育の交流の一つのきっかけになれば幸いです。ご多忙のところ、お声をお寄せくださった先生方、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。